

移動後、第十三軍司令部へと転属命令を受け呆然としました。何が何だか全く予想もつかない事態となりました。こんな混沌とした時に終戦を迎えました。

終戦後、第十三軍司令部内に復員本部ができて、私は復員本部要員に編入され、各復員部隊と復員本部の間の伝令要員に編入されました。上海での終戦後の給与は、上海は前線とは異なり物資も豊富であり加えて軍司令部でもあり比較的恵まれておりました。

復員は復員業務に携わった関係か比較的に遅く、昭和二十二年六月、階級は兵長に進級していました。

復員後、大積村に帰って、父や祖母は元気で迎えてくれました。村内の製材所の作業で山に行つて、伐採作業や木材の搬出作業や建築工事の雑役作業等なんでも手伝つて働きました。

父の薦めで名古屋に出て働くこととなり、当初はヤミ市場で商人達の取り扱う商品をリヤカーに積んで運ぶ小運搬業から始めました。次いでオート三輪車を購入、免許も取つて小運搬業として働きました。

昭和二十七年、故郷新潟県の隣村の女性と結ばれ、二人の娘の父親として働きました。残念な事に昭和五十七年妻に先逝され、現在も一・五トン車を自分で運転し、建築資材等の小運搬を業として働いています。家は現住所へ新築し、独身の娘二人と三人で暮らしています。現在七十七歳ですが、月に半分は働いて頑張っています。

うすれ行く記憶の中から

忘れざる八月十五日の回想

愛知県 水野 清次郎

平常の長沙の朝は静かでした。不寝番や歩哨に立つた早朝など、半ば崩れた土壁の門の外を見ると、早起きのリヤンミン（良民）が、野菜や果物などを天秤棒で担ったり、ヤンチョ（洋車）を小さくしたような一輪車に商売物を積んで売り場所へ出て行く者が三々五々歩いてる位であったのです。

ところが、そんなこの街もその日は朝早くから爆竹が鳴らされ始めたのです。立て続けに鳴らされる「パーンパーン！ パチパチ」という爆竹の音に、私達は深い眠りから呼び醒まされました。熟睡の中から叩き起こされたようで、暫くの間は頭の中がはつきりと覚めなかつたようです。外はまだ晴れやらず薄暗くて、同部屋の者は一様に眠りを醒まされて「なんだ、今頃」と皆少々寝足らずで不満顔でした。

ところが、そのつんざくような、けたたましい音は衰えるどころか、時が過ぎて行くに従って、大きく、高くなって行くように思えるのでした。爆竹の音は四方八方に広がり、私達の宿舍も取り巻いて意地悪くも、これでもか、これでもかという風に、少しも休まず鳴り続いたのでした。時には耳をつんざくような馬鹿でかい音も混じっていて驚かされたのです。

その前日でした。正確に言うと八月十四日の午後、明日、つまり「八月十五日の正午十二時に重大発表があるから第一正装にて庭前に整列すべし」と言う隊長殿からの命令が出されていたのです。

重大発表とは何だろう。第一正装と言ったって終わったばかりの芷江作戦では、随分ひどく叩かれ散々な目に遭って、何人かの戦死者や負傷者を出し、やっそこまで逃げ延びて来たところではないか。今のところ食う事が精いっぱい、着替える服装の配給もない。こんな状態で何を着るんだ、とそんな声もあつたのです。その夜は明日の重大発表という事について、皆がそれぞれに話し合つたのです。

海外では日本軍が連合軍に大勝して講話条約が締結されたのだぞ！ と誠に大平楽な、明るい話も出たのです。しかしまた中には「否、日本が負けたのさ、どうせそんな発表さ」と惘然として、そんな事を言う先輩殿もあつたのです。色々様々な意見があつても、はつきりした結論は出なかつたのです。

ところが朝です、まだ暗い夜明け前から爆竹が鳴り出し、その音は時間が過ぎると共にますます大きく高くなり、その合間に「わーっ！」「おーっ！」とか喚声声が聞こえて来るのでした。しばらくたって「外には

出るな」と言う外出禁止令が出されて、ことのなりゆきが想像されたのです。それでも誰一人として「我々は負けたのだ、日本は負けたのだ！」とは口に出しませんでした。

その日の事は不思議に私はよく覚えていのです。連日猛暑が続いて、その日も朝から暑かったのです。朝食を終えた頃から気温はぐんぐん上昇して、じっとしていてもじりじりと汗がにじみ出て来るのです。いつものような命令も出ず、やることもなく、外へ出る事もできず、部屋の中に閉じこもっている私達の耳に、間断なく響いて来る爆竹の音はもううとうとしさを、はるかに通り越して、休みなきどき執拗さには腹が立ちました。ほどほどにしておけと怒鳴り返したような気持ちでした。

時々湧き上がる喚声と、それに呼応するかのようには鏡や太鼓を打ち鳴らして氣勢を上げているのです。それはあたかも私達に挑戦しているかのようでありました。

時間の経過と共にますますその高まりは、高く大き

く広がり、いつまでこの馬鹿騒ぎは続くのか、いつになつたら止むのかと懸念されるのでした。重大発表があると知らされていた正午頃が最大、最高であった、と思うのです。「無条件降伏！ ポツダム宣言受諾」は、私達日本軍人よりも中国民衆の方がはるかに早く知っていたのです。

土壁外の大喚声を聞き、腹を立てながら持つて行き場のない焦燥をどうすることもできず、唯々じっと我慢するよりほかに仕方がなかったのです。この大喚声に立ち向かって出て行ったとしたなら、たちまちのうちに荒れ狂っている民衆に取り巻かれ、打ち倒されてしまうであろう、一巻の終わりです。それこそ死にと言うものです。一時の恐れで、つまらない目には遭いたくない。そんな張りのない気持ちで、私達は重大発表の時間を待ったのでした。

朝から指揮班も静かで何も命令はなかったように思います。毎日次々と時間に追われていてゆっくりとする暇もない。私達には思わぬ仕事のない時間にいささ

か手持ちぶさたで、昼までの間の時間を持ってあましました。定められた時間よりかなり早く部屋より外に出、その時間を待ちました。

正午に近い真つ昼間の太陽は頭の真上にあつて暖かかったです。中国家屋の屋根は低くつて、その家影も短いのです。その浅い影に立ちました。壁外の騒ぎだけは相変わらず、ずーっと続いていて、その止まるどころを知らず興奮は興奮をさらに増すようで、その踊り狂っている様子が壁の中にもよく伝わって来るのでした。しかしさすがに彼らも我々の中に入って来る様子はありませんでした。

日本軍の強さ恐ろしさをよく知っていた事と思うのです。「土壁の中には侵入しない、日本軍には手を出すな」とそんな一線だけは守っていたのです。

正午十二時何十分か前に、宿舍の前の庭園というか少しあつた広場に整列して時を待ちました。暑い太陽の直射を受けて汗は吹き出し、立っているだけで上衣もぐっしょりと汗がにじんでいました。隊長殿の挨拶

があつてから、台の上に置かれたラジオにスイッチが入れられました。が感度が悪く、「ガガ……ザザ……」と言う雑音ばかりが大きく入つて、大切なお声は残念ながら十分によく聞き取れなかつたのです。けれども、その聞き取りにくいお言葉の中から、我々大日本帝国は負けたんだ！ と言うことをはつきりと知つたのです。整列からわずか二十分、三十分程で重大発表の儀式は終わりました。

ラジオの放送前から、否、隊長殿の挨拶の前から、我々全員は休めの姿勢から気を付けになり、不動の姿勢にうつり、その固い姿勢のまま身動きもせず、じつと耳をすませました。しわぶきひとつ立てず全神経を耳に集めたのでした。その一時には暑さも汗もすべてを忘れてしまつて、無我の境地だつたのです。

「解散！」と言う号令の声にも心なしか力がこもつてはおりませんでした。その号令を聞いても、それは遠い所から響いて来るようで、そのまま気の抜けたように呆然と突つ立っている者が多かつたようです。しばらくしてから気が付いたように家屋の中に入つて行

く者、家の中へは入ろうともせず壁に寄り掛かっている者、うずくまる者、皆まちまちでした。そうしたさまざまな戦友達の中で、私の場合、その時の様子を思い浮かべて見ると、私はすぐ家の中には入らなかったように思うのです。

涙は不思議にも出ませんでした。しかし腹の中がいつべんに空になってしまったようで、がっくりと力が抜け軽くなったのです。

「日本は負けたんだ、神州不滅！ その日本が負けたんだ、我々は負けたんだ」と、ただそれだけが頭の中を駆け回って、これからどうなる、どうなって行くのか、そんな事は少しも考えられず、ましてその他のことについては、何にも浮かんではこなかったのです。

うつろな気持ちで見上げた空はあくまでも青く晴れ上がっていて、その下方に真夏の白い雲が厚めに重なり、二つ三つゆっくりと東の方に流れて行きました。ちょうどその時、その白い雲を追うように飛行機がた

だ一機だけ悠然と飛んで行きました。私の眼には雲も飛行機もまったく高々度で機影は小さかったのです。かすかに聞こえて来る爆音、今までと違ってゆったりとしたように聞こえて来ました。そしてその機影から黒い塊が落され、それが初めは小さく、下に落ちて行くに従って広く大きく拡がって落ちて行く速度もゆっくりとなり、それがひらひらと舞い下りて行くように見えるのです。

私は今でもその時の様子をはっきりとよく覚えていなのです。それまでは毎日必ず午前と午後、何回となく飛んで来る敵の飛行機が、三日、四日前からほとんど飛んで来ない。雨降りでもないのに飛んで来ない、それを不思議に思っていたのです。

芷江作戦に参加する前から大陸の制空権はあちらさんに持って行かれておりましたから、我々日本の友軍機が飛んで来るなぞというとは全くなくて、飛行機が飛んで来ても、その機影さえ見ずして「爆音！ 爆音！」と言う警戒の叫び声を聞く。こちらもそれに答えて同じように叫ぶのでした。

敵の飛行機が飛んでこないことは防空壕を探したり何かの物に身を寄せたり、逃げまどうなどのわずらわしさや恐怖がなくて大いに楽ではあったが、その恐ろしい敵機が飛んで来ない、姿を見せない事はいささか不安も感じていたのです。すでにその頃、敵さん方は今日のことを知っていたのです。かすかに聞こえて来る高々度からの爆音、翼が時折きらりと光るのです。そんな中から投げ下ろされたであろう一粒の塊が空中に浮かぶ。それが下の方に落ちて行くにしたがって横に長く拡がり落下する速度がゆるくなり、だんだんマンマンデーに（ゆっくり）なって落ちて行く。そのうちにばらばらになったその物はひらひらりと二転三転して舞うのでした。それは重慶からばらまかれた宣伝ビラだったのです。

風の流れたためか、私の部隊の方には飛んでは来ませんでした。後日聞いた話ではそれは敵の発行の宣伝ビラで、日本降伏を自国民に知らせると同時に中国の軍隊、また中国民衆との衝突を起こさぬように、と言ふ警戒やら注意のビラでもあったようです。

海外ではとにかくとして、大陸では負けていない日本軍の心境を思いやって、中国軍や民衆が無益ないさかいを起こさないように、との配慮とも思われるのでした。我々日本軍としては大陸で最後となった芷江作戦では、散々痛めつけられたけれども、大陸での大勢としてはまだかなり余力を残していたように思うのです。その日本軍を刺激してトラブルでも起こしては、双方共に得策ではない、そんな事も考えられたのではないのでしょうか。

蒋介石の「徳を以て報いよ」と言う言葉が改めて思い出されるのです。

あれから半世紀、年は移り変わり早や五十余年になります。涙の出るような、辛い事も数々経験して来ましたが、幸運にも恵まれて栄養失調寸前とはいいながら、お陰様で無事故故国日本の土を踏み、古里へ帰り着く事ができました。しかも現在八十歳と言う高齢を迎え、老いながらも平穩な日々を送っております。

毎年のように行われて来ました戦友会も既に幾十

回、休む事なく参加して参りましたが、出席して同年兵の皆さんに八月十五日の事を聞いてみますと、その記憶はまちまちで、ほとんどの人が「記憶がない」「覚えてはおらん」と言う答えが多かったです。でも時間をかけてお互いに話し合っているうちに、記憶

が甦って来て、「そうだったな」と言うこともたくさんありました。思わぬ出来事もありました。

私については年と共に記憶が薄くなり、その前後についてはまったく忘れ、覚えもないのに、八月十五日の長沙の街の朝闇のうちから鳴り続けた爆竹の馬鹿でかい音、白く乾いた庭園前の崩れ落ちた土壁にもたれて見上げた青い空と白い雲、気が抜けてうつろであったのにもかかわらず、八月十五日が来るたびに今でも我が心の中に焼き付いていたように蘇るのです。

私の軍隊生活はほんの僅かで、数えてみますと三カ年にはんの少し足りません。けれども私が生きて来た八十年の中でそれが五年にも十年にも思え、しかもその生き様は尊くさえ思えているのです。そんな昔を思い出したたびに、私は心の中で自問自答しています。

「俺は国の為にと召されて皇軍の一員として大陸へ渡って行った。だが果たしてその価値があったであろうか、役に立ったと言えるであろうか？」とつまらない疑問を持つのです。

白く乾ききった長沙の街、石を敷きつめた街でした。私達宿舍の前のファンズで靴の修理屋をやっていた義足の元日本軍兵士、第一次長沙作戦で日本軍に見捨てられ負傷の身で捕虜になってしまったあの人は今どうしているでしょうか。

私は子供や孫達に、私が味わった戦争の事についてはあまり語った事はありません。けれどもそれはいいのでしょうか。語り残すべきではないかと、そんな気持ちも持つのです。しかしそれは、どちらにしても「私の戦記」を書き始めたのが遅かった。そしてそれはしよせん私の自己満足にはかなりません。

私は書き置くべきであった。「今となっては遅かったな！」と、先の時間の少ないことを残念に思っている次第です。